サロン・あべの

サロン・あべの　NO.4
発行日 昭和61年10月18日
発行者 〈サロン・あべの〉運営委員会

需給一体の語り合い

〈サロン・あべの〉にはじめて参加した人、毎回楽しみに待っている人。だんだんその輪は大きく広がっている。

障害者と健常者が共にコミュニケーションを深めることを大切のひとつとして活動している〈サロン・あべの〉の今回の出会いのテーマは「コミュニティーケアとボランティア」でお互の悩みやボランティア活動の内容などを語り合い、地域での活動を考えてみたい。と昭和六一年九月二〇日、十七人の方々が出会った。

そこで、自己紹介をかねた参加者全員の言葉（要旨）を掲げよう。

自己紹介（要旨）

●小倉覚一さん
当年四十五才…なぜ、還暦の年に、これから毎年、年と引いていこうと友人と約束した年で…
二年半くらい前から、何か役立つことがあればと、連絡協議会、あべのボランティア・ビューローから入るニーズによって友愛訪問や手引などのボランティア活動をしている。
ボランティアは頼まれたことだけをするのではなく、こちらから主体的に手をかす。こうして付合っていくうちに友人関係がはじまってくる。

●阪田富子さん
連絡協議会、あべの・ボランティア・ビューローでボランティア活動をしている。まず内容は市大付属病院でもっぱら言語障害者とボーンセンターでの手引など。定試はお盆前の講習会、約五週間まで。最長。
どんな場合でも依頼者がボランティアに対して心を開いてくれるようになればやりやすく、やり甲斐がある。また心を開きやすいように、こちらももっていく。

●浦野清さん
阪南町に住んでいる。みんなに逢える為より。

●松原兵美子さん
喜連でマッサージ業を営む。手引のボランティアを平野区では知らないので、ボランティア協会が友人に頼んでいる。また、役所内のことであれば、福祉事務所の人に書きもらなどは頼む。

●加納みすずさん
政方で飲食店「とくりや」（地祝＝みすずちゃんの店）を両親といっしょにし、食は歌を唄いながら教えるという、歌将の方法で、手話を低料金で教えている。その合間に絵や工芸もしている。

●金子花江さん
障害者との関わりのキッカケはシャープ婦選工場での短歌の会で、その後関心をもつようになり、サロン・あべのへは発会式以来二度目。

●岡　知史さん
あべの・ボランティア・ビューローの職員時代から、このサロンあべのに関わっている。これからもボランティアとしてやっていきたい。

●旭　紀子さん
手話をはじめて三年半。昨年からは手話をはじめて、訪問活動。

●大島　功さん
十年前に失明、もうすぐ五年後にあるという。ボランティア活動はあってもやっている。赤ちゃんの笑顔紅葉のような手を見れば、自然にほんわかうまれ、免疫やわらぐやはないか。と思った。こう一言に一念発起、目が見えなくても何か出来る。十倍もたろう。一つでも二つでも返上するのではと、考えた。

●杉本茂一さん
小学校の教師を定年退職。障害児教育の研究をしている。昨年、あべのボランティア・ビューローが出来たときに関心をもつ。サロン・あべのの話は聞いていた。出来たのか、どうなっているのか、気にしていたところ、新聞に出たので参加した。

●辻本輝子さん
阪南町で洋裁をしている。健康を足腰に車を使っているので、運転には自信がある。

●中村菊子さん
交野に両親と住み、大阪、会社勤めをしている。親が弱いので、駅の料金表に苦労している。

●石田　律さん
「出あい　ふれあい　助けあい」この三つの「あい」をスローガンに暮らしている。

●倭　満世子さん
家族に障害者が出て、はじめて障害者の痛み、周りの方の苦労がわかり、障害を乗り越えて健常者と共に活動しているサロンあべのの集団気がすきで、毎回の参加を楽しみにしている。

●林　智子さん
看護婦。はじめてこの会に参加したが、たまたまボランティアの方々が知っていた。今後は勉強になるので、積極的に参加したい。

●平野祥子さん
時間の許す限り、手話通訳として障害者と関わりともっている。

●冨田慶子さん
障害者がノーマルな目的に近づく健常者の接客を求めて活動をしている。
ビューローを中心に障害者ともっとふれあいたい。

（頂　↑同）

ボランティア活動範疇の域

ある人が若干で、先行くんに声を掛けたが返事がない。指、角人が話しているのに、なぜ…と　ケンカになった。声を掛けられた人が聴力障害者であることが　わかないために起った出来事である。

そこで――

視力障害者の白い杖に変るものは聴力障害者には何かないだろうか。訪問を受けた時にわかる設備の完備、それと玄関先でわかるステッカーの貼付を思ったが――（大島さん）

これに答えて――

随分、以前から外見健常者にみえる聴力障害者の問題として、バンカチやマークは考えられているが、人格侵害問題や組織力の弱さ、聴力障害者同士の連絡網の出来にくさなどが壁となって普及が遅れているのは否めない。このあたりにも、ボランティアとしてしなければならないことがあるのでは…と旭さんはいう。

この問題はボランティア活動の範疇の域の広さを痛切に考えさせられた。

それに加えて、松原さんの言葉にあった「ニーズの持って行き先は。」大島さんが代弁された「技術をマスターしてボランティアとして活動したいが障害者との関り先は。」このごくごく基本的な問題も考えさせられた。

PIROMIRI

手話通訳・旭　紀子さん

「旭さん　12月6日あけといて」
「サロンあべの・クリスマス会の日程」
バッグから取り出した手帳には、どかのおエラ方も顔負け――年末迄ビッシリのスケジュールが記載してある。来年3月卒業を控えて、卒論の作成、勤務の傍らしていたボランティア活動は勤めをやめた3月以降増える一方。まさに八面六臂の活躍をする本人さん。この無尽蔵のエネルギーが細腕のどこに秘められているのだろう。かといってガムシャラに行動するばかりではない。手話通訳をする関係もあって舞の側から見、そして言葉に心掛けているが、ときとして健聴者の自分が顔を出すのを感じている。と反省を忘れない。

泳ぐが如く、流れるが如き自然のような指での通訳は印象的である。この自然の中指と薬指を曲げ、親指と人差指小指を延ばされたらどうしよう。すかさず「これを送る相手……いったなったら現れるでしょうか。送ってくれる男性も……あ、ねびしい！…『イートンネン』」と。彼女特有のイントネーションで『イートンネン』という　オトコ言葉を怒るとき、そのときの彼女の魅力はまた、格別。

編集後記

●例会後、恒例のミニミニ手話教室。九月は加納みすず先生の指導で「あなたお元気ですか？」●九月の例会で二四六円のカンパ。有難うございました。●十月十八日「障害者が語る地域社会」をテーマに出会います。

となりの放送

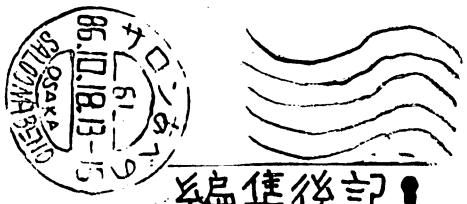
SALOON

市民ふれあいまつりへのご協力のお願い

拝啓、初秋の候、貴殿におかれましては益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。さて、私共、おおさか・行動する障害者応援センターと障害福祉情報センターにおきまして、この度、下記の目的及び要綱で、市民ふれあいまつりをすることになりました。
つきましては、私共の活動の趣旨及びこの企画を十分ご理解いただきまして、どのような形でも結構ですので、ご支援、ご協力を賜わりお願い申し上げます。ご多忙中のおり、誠に恐縮ですが、何卒よろしくお願い申し上げます。

敬具

記

開催日時：昭和61年11月9日(日)　AM10:30～15:00
開催会場：大阪市立長居公園センター
開催目的：地域に対する障害者福祉の啓発と交流、参加団体間の交流
主　催：市民ふれあいまつり実行委員会
ご協力頂きたい事：
当企画への参加、
販売物品の提供・資金援助・広報
この企画に対する協賛
当企画の告知及び　当日のお手伝い、など

連絡先　〒530　大阪市北区同心1丁目5－27
市立社会福祉研修センター3階
大阪ボランティア協会　気付
おおさか・行動する障害者応援センター